世界が認めた現代アートの祭典『瀬戸内国際芸術祭』

先だって、人気俳優キアヌ・リーブスが、主演を務める映画「ジョン・ウイック　パラベラム」のジャパンプレミアムのため、2年3か月ぶりに来日した。イベントより少し早めに日本に到着したキアヌはなんと、香川県の直島や豊島、岡山県の犬島などを訪れた。

それぞれの島々は、現代アートの祭典「瀬戸内国際芸術祭2019」の舞台。わざわざ現地まで足を運ぶだけの魅力とそれだけの知名度が世界中に拡散している証左であろう。

特に4回目の今回は、米国のニューヨークタイムズ紙電子版や同国の人気女性ファッション・ライフスタイル誌「VOGUE（ヴォーグ）」電子版などにも特集として取り上げられ、欧米圏での認知度が一層高まっている。特にニューヨークタイムズ紙電子版では、2019年に行くべき世界旅行先52か所中で、第7位に輝いた「瀬戸内の島々」の特集を掲載、実際に瀬戸内国際芸術祭を訪れた同紙記者による体験記で、現代アートはもとより、外国人から見た島暮らしの魅力にスポットを当てている。

来場者は前回開催（2016年）と比べると約14万人増加、春、夏、秋会期合わせて過去最多となる約118万人が来場し、アジアや欧米などから観光客が以前にも増して目立つようになった。

来場者が増えた一方で、課題も浮き彫りになった。土日祝を中心にフェリーや高速艇の積み残しも頻発。高松港では乗船列の場所が分かりづらいなど、戸惑う観光客もみられた。

間違いなく知名度は上がっている。必然と期待も高まる。次回開催までの期間を長いと見るか、短いと見るか。知恵の絞り甲斐がある。

四国新聞社　東京支社長兼広告部長　岡本直樹

瀬戸内国際芸術祭は、岡山と香川両県に跨り、瀬戸内の島々を舞台に開催される現代美術の国際芸術祭。2019年の会期は春・夏・秋の3会期総計107日間で開催され、11月4日をもって閉幕した。